

## プラハを照した灯 (2)

— ミレナ小伝 —

鈴 本 達 哉

### 5 ジャーナリズムでの名声

カフカと文通を始めた頃から、つまり1920年の初め頃から、ミレナはプラハの新聞トリブナ (Tribuna) へ、婦人の流行についての記事をヴィーンから送り始め、やがて定期的な寄稿者となった。すぐれた美的感覚と文章力それに卓越したドイツ語学力を駆使して、ヴィーンのモードの世界の様子を巧みにプラハに紹介することによって、モード通信員としての彼女の名声はいやが上にも高くなった。しかし一方、夫ポラークとの仲はますます行きづまり、遂に離婚の破目になる。だが魅力的な女性である彼女を世の男性達は放っておかなかった。旧オーストリア帝国の将校で、アウトサイダー的な貴族であったシャフゴツチュ (Schaffgotsch) が彼女に深く傾倒し、彼女もまた彼に引かれ、こうして二人は結ばれた。彼は革命時のロシヤで暮したために共産主義に魅せられて党员になった人物である。いわば異端的な貴族である。

この結婚以後ミレナの活躍はますます顕著になり、遂に活動の場を故国に求むべく、夫を説いて、二人そろってプラハへ戻ることにした。だが、ヴィーンからプラハへ直行せず、ドレスデン郊外に居住するミレナの友人アリサ (Alice) 夫妻を訪れ、ここに1年近く滞在してから、1925年に二人そろってプラハへ戻って行った。ポラークと二人でヴィーンへ出てから丸7年間ミレナはプラハを留守にしていたわけである。7年前のプラハは第一次大戦中から直後のこととて、かなり混乱していたが、今や名実とも完全な独立国となったチェコスロヴァキアの首都としてすっかり落ち着いており、街には清新で自由な空気があふれていた。故郷に帰ったミレナは多くの旧知の人々から暖かく迎えられ、ジャーナリストとしての活躍にもますます油が乗った。そして遂に1926年、今までに書いた短評類に補筆訂正を加えて、一冊の本を著わすほどになった。それは「素朴さへの道」 (Der Weg zur Einfachheit) という表題の書物である。これは、調和と自然な素朴さこそが服飾美の極致である、という主旨の彼女の持論

を述べたもので、いわばミレナの服飾美学の総決算であった。だがこれは彼女の活動のほんの序曲に過ぎない。彼女の本領は、ドイツ占領時代の命をかけた政治ジャーナリストとしての活躍にあるのだが、しかしこれは大分あとの話である。

ところで、ミレナが大活躍している一方、夫のシヤフゴツチュはどうかであったであろうか。彼は全く未知の土地へ来て、新しい環境に適應できず、何等仕事をする能力もなく、ただ妻のあとを追うだけであった。いつもミレナの居場所を尋ね歩いてばかりいるので、「ミレナはどこ」(Wo ist Milena)というあだ名をつけられるほどであった。ミレナはこの夫を働かせようと骨を折ったが、さっぱり反応がなかった。逆に夫は妻の努力を煩わしく思うようになり、遂に彼女から離れて行った。後年ミレナは、強制収容所でブーバー・ノイマン女史に「私は多分いつも弱い男しか愛することができないように生まれついているんだわ。——実際男達はだれ一人として私に気を配ったり保護したりしてはくれなかったわ。女があまりイニシヤティブを取ると、かえってそのために罰を受けるのね。」<sup>(1)</sup>と語っているが、カフカが「母なるミレナ」<sup>(2)</sup>と呼んでいるように、まさに彼女は典型的な母性的女性であったのであろう。ポラーク、シヤフゴツチュそれにカフカ、いずれも何かしら人間的に弱さを持った男達である。ニューアンスの違いはあっても、彼等は皆それぞれ、ミレナの母性的愛情に甘えたのかも知れない。

さて、シヤフゴツチュと別れてからミレナは、Krejcar というすぐれた建築家と知り合い、お互いに愛し合うようになった。先の失敗に終った二度の結婚のことを考えると不安ではあったが、彼への強い愛情に抗し切れず、とうとうミレナは結婚に踏み切った。1927年のことである。そしてそれからの数年間は彼女の一生でもっとも幸福な時代であった。ジャーナリストとしての活躍の一方、夫を励まして建築の仕事に精進させ、また彼等夫妻のもとに集まる多数の建築家や画家達と芸術論を戦わせながら、楽しい毎を送った。Krejcar はオーストリアの林務官の息子であったが、若くして建築に憑かれ、プラハ芸術アカデミーの建築科で学んだ秀才である。当時まだ本国フランスでもそれほど評判になっていなかったル・コルビジュの作品を非常に高く評価するほどのすぐれた感覚を持っていた。この建築家との生活はよほど楽しかったらしい。「あの頃のことを振り返ってみますと、私はまるでただ踊っていただけのように思われます」<sup>(3)</sup>と後年ミレナは語っている。

しかしこの幸福も長くは続かなかった。彼女はこの幸福の結晶、即ち二人の

間の子供をほしがった。やがて彼女は妊娠した。けれども医者によると、ひ弱な体質の彼女には子供を産むことは無理だと言う。どの医者へ行っても言うことは同じである。しかし彼女はあきらめなかった。そして遂に意を決して、体を丈夫にしようとして、山中の冷たい湖で冷水浴をした。ところが意に反して、丈夫になるどころか、激しい悪感と高熱に襲われ、その上足が麻痺してしまった。敗血症との診断であった。まだ殆んど絶交状態であった父も急を聞いてかけつけ、病床につきっきりで、痛み止めのモルヒネ注射を打ってくれた。やがてミレナは女兒を出産した。Honza と名付けられた。だが母体は危険な状態となり、ミレナは幾度か死線をさまよったが、驚くべきことに彼女は死に瀕しながら、父と激しい口論をしているのである。即ち、もしお前が死んだら子供を私が育ててやろう、と父が言うと、ミレナは、お父さんに渡すのなら、モルダウ川に投げ込んでもらったほうがよい、と答えるのである<sup>(4)</sup>。何と激しい気性であろうか。いかに小さい時から反感を持っているとは言え、とにかく今は献身的に看病してくれている父である。その父に向ってこのような激しい言葉を浴せるとは、何と気性の激しい、執念深い女性であろうか。だが、父はこんな罵言を浴びせられてもよく我慢して、医者として取り得るあらゆる手段を講じて治療に当たってくれた。こうした父の熱心な治療の甲斐あって、またミレナの生きたいという気力も手伝って、彼女はどうか一命をとりとめた。そして約1年間の闘病生活の後、やっと退院することができた。しかし、痛み止めのためにモルヒネ注射を打ち続けていたので、退院の時はモルヒネ中毒に侵されていた。また足がびっこになっていた。顔はふくれ、体ぜんたいがぶくぶくと太り、かつてのスマートさは跡形もなく消え失せていた。かくしてミレナは女性としての自信を失い、何か強い心の支えを求めずにはいられなかった。そのような彼女を捕えたのは共産主義であった。入党したのは1931年である。それ以来ミレナは共産主義雑誌 Tvorba に拠って論陣を張った。彼女の黨員生活は5年続いた。そして1936年自から党を出てしまった。彼女が党を去った理由はいろいろ挙げられるであろうが、先ず第一の理由は、彼女が社会主義に徹し切れなかったということであろう。その証拠に、彼女はすでに入党の初期に、社会民主党を兄弟党と呼んで仲間をびっくりさせているのだ。また祖国チェコのことよりもソ連のことを気にしがちな党への不満もあったであろうし、党の意外な冷淡さに立腹した点もあるだろう。例えば、その当時の流行としてたくさんのヨーロッパの建築家がソ連に出かけて行って建築に従事したように、ミレナの夫 Krejcar もソ連に出かけて行った。そして委嘱を受けて、労働者のための

保養所を建てようとした時、全く建築に素人であるソ連の党員が「建て方がモダン過ぎる」とか「社会主義における生活の要求に合わない」とか言って異論をさしはさんだ。彼がソ連の実情に幻滅した手紙をよこしても、党員の建築家達は誰一人としてソ連共産党の絶対性を信じて疑わず、彼の手紙を冷たく黙殺してしまった。また、当時(1933年以降)すでにナチスに追われてチェコに亡命していたユダヤ人やドイツ人への党の態度が、党員亡命者に対してと非党員亡命者に対してとはひどく違っていた。非党員亡命者に対しては全く冷淡な態度を取った。このような種類のことが重なって、恐らく党に嫌気がさして来たところへ、1936年の夏同志に対するスターリンの公開裁判が行なわれた。この知らせがプラハに達するや否や、ミレナは他の何人かの友人と一緒に、すぐ党を脱退してしまった。所詮彼女は一定の政治的イデオロギーに徹し切れぬ人間だったのだろう。

一方、党員生活のこの5年間のうちに、ミレナは強固な意志を以てモルヒネ中毒から脱し、湯治場での厳しい訓練によってびっこも完治し、また太り過ぎも直って、元のスマートさを取り戻していた。そして Krejcar とも別れて(以後彼女は再び結婚することなく、ずっと独身を通した)、新しい気持で次の活動へとは行って行ったのである。

## 6 反ナチ闘争

ところでこの間に、ヨーロッパの情勢は風雲急を告げつつあった。1933年に政権を掌握したヒットラーの率いるナチス・ドイツがその領土的野望を果さんと、虎視眈々と四方八方に目をつけていたからである。チェコの西部には古来多数のドイツ人が住んでいた(チェコ総人口の約20%)。中でも特にドイツ人の多いのは西北部のズデーテン地方であった。この地方のドイツ人は最初はチェコ政府に従順であったが、本国ドイツでのナチスの政権獲得と共に、それを力と頼んで自治を要求し始めた。自治要求を支援するために国境に押し寄せたドイツ軍の圧力、それに対して積極的にチェコ政府を援助すべき立場にあったイギリス・フランス・ソ連などの大国の意外な冷淡さ、国内での民衆の反独的興奮、等々悩みは深かったが、時の大統領ベネシュ(Benesch)は熟考の末、自治要求書に署名した(1938年9月4日)。こうすることによってドイツのチェコへの干渉をこれ以上は防止しようとしたのである。しかし結果は逆であった。ドイツに対して刺激を避けようとするチェコの温順な態度と英・仏・ソ連などの列強の弱腰とを見抜いたヒットラーは、遂にズデーテン地方の割譲を要求、こ

れを成功させた。以後、味をしめたヒットラーはチェコに露骨な内政干渉を行なった。即ち、1939年3月14日、自分が後楯となって、スロヴァキアをチェコから分離独立させた。そしてその同じ日にヒットラーは、ベネシュのあとをついだ新大統領ハーハ(Hácha)をベルリンに招き、翌3月15日には、チェコの残りの地域即ちボヘミア・モラーヴィア地方をドイツ保護領とする旨の公文書に脅迫をもって署名させた。ここに、第一次大戦後にやっと数百年ぶりに独立を達成し大いに自由を満喫したのに、それも束の間、チェコ民族はまたもや植民地の悲哀を味わうことになってしまった。カイゼル時代の夢であったユーラシア横断路(ハンブルク・プラハ・ブダペスト・イスタンブール・バスラ)の実現を企図するナチス・ドイツにとってチェコがその企図遂行の第一の関門であった、ということはチェコ国民にとって誠に不運であったと言わねばならない。

このような非常事態に際し、わがミレナはどのような生き方をしたのだろうか。共産党脱退後、彼女は自由・民主を旗じるしとする民族主義的な週刊紙Přítomnostに迎えられ(1937年)、ここで政治記者としての活躍を開始する。特にドイツ軍のチェコ占領後の活動がめざましい。次にいくつか彼女の活躍ぶりを、彼女が書いた記事を引用しながら述べてみよう。

先ず、Přítomnost 1939年3月22日号に載った、ドイツ軍プラハ侵入の朝の状況を描写したミレナの文章から少し抜粋してみよう。

「……4時(筆者注:3月15日午前)、チェコラジオ放送局が規則正しく5分間隔で、短かい同じ言葉を放送し始める。『放送いたします、放送いたします、ドイツ軍が国境からプラハへやって来ます。落ち着いて下さい、仕事について下さい、子供達を学校へ送り出して下さい』……屋根の上にはぼんやりした朝の薄明り、雲のかなたのにぶい色をした月、人々の寝不足の顔、熱いコーヒーのしたたり、規則正しいラジオ放送……8時、子供達の群がいつものように学校へ向った。労働者やサラリーマンがいつものように仕事に出かけた。市街電車はいつものように満員であった。ただ乗っている人間だけは違っていた。彼等は立ちそして押し黙っていた。私は、こんなに多くの人があんなに深く沈黙しているのをまだ目撃したことがない。路上には全く人の集まりがなかった。役所ではだれ一人机から頭をあげなかった……」

やがて9時35分、ドイツ軍の先頭がプラハの中心街に到着した。ミレナの描写は更に次のように続いて行く。

「……歩道の上を群衆がいつものようにぞろぞろと歩いて行く。しかし誰も上を見たり、見回したりしない……どうして何千という人が突然まったく同じよ

うな一致した行動を取るのか、また、なぜお互いに全く知らないこんなに多くの人が同じようなリズムで行動するのか、私には分らない……ただドイツ系の住民だけがドイツの軍隊を歓迎した」<sup>(5)</sup>

ここには大きな歴史的事件の一瞬が、冷静な筆致で見事に描き出されている。すぐれたジャーナリストの面目躍如、というところである。

さてところで、ドイツ軍の進駐と同時に、ゲシュタポがチェコ全域に入り込み、言論・出版への厳しい統制が始まった。ミレナを初めとして Pritomnost の記者達は、発行停止処分に遭うことなく、さりとしてナチスの御用新聞に墮することなく、なんとかして新聞をできるだけ長く発行して行こうと努力した。かくしてミレナの大活躍が開始される。即ち彼女は、あらん限りの自国語に対する蘊蓄を傾けて記事を書いたのである。それは、表面はいかにもドイツ人をほめているようでいて、その実はドイツ人に対する嘲笑と愚弄に満ちているような文章であった。次にその一節をあげよう。

「以前チェコ兵の一連隊が窓の下を通った時は、通りに彼等の足音がかちかちと楽しそうに響いた。しかし今日ではただ一人のドイツ兵が喫茶店を通り抜けるだけで、彼のしっかりした歩き方ですべてのコップが、がちゃがちゃと鳴る。そして石膏細工が天井から落ちてしまう……ドイツ人は命令に従うことを理解しているように、また命令することもよく理解している。ドイツ兵は上官の前では震え、命令に対しては無条件に服従する。それに対して、チェコの上官達の態度は何と違っており、そして何と軍人らしくなかったことだろう。彼等は兵隊達をどなりつけなかっただけでなく、兵隊達が、何か重大なことを自分達は要求されているのだ、と悟るまで、親しく彼等を説得した」<sup>(6)</sup>

ミレナは上のような内容のことを練りに練ったチェコ語で表現したのである。これは相当に危険な試みである。もしチェコ語に熟達したドイツ人が読めば、筆者の意図は忽ち暴露されてしまう筈である。だが幸いなことに、検閲関係のゲシュタポの語学力はそれほど豊かではなかったもので、彼等はドイツ人がほめられていると思って、喜んで検閲を通してしまった。

また、彼女は、時にはチェコ民族の誇りを高らかに述べて民衆を激励した。

「我々は、文化水準・職業的技能・種々の能力・勤勉さ・人間的誠実さに関しては、ドイツ人と対等である……強靱な忍耐力を愛せ、勇気を高く評価せよ、やむを得ない事情がある場合は何物をも恐れるな、なぜなら恐れる理由はないからだ、そして真実を語れ……我々はヨーロッパ文化をもった目ざめた民族であり、我々の一人一人は考える人間である」<sup>(7)</sup>

このようにミレナは、一方では合法新聞に拠って、ナチスへの敵愾心をユーモアとウィット及びすぐれた文才によってカモフラージュしながら反独的な記事を書いて、チェコの民衆に民族の誇りを失わせないように努力すると共に、他方では、非合法紙を発行して反ナチ闘争を展開した。即ち、偽名で非合法新聞 Boj（「闘争」を意味する）を発行、鋭いナチス批判を行なった。生命を賭した危険な活動であった。

だが、ミレナをゲシュタポによる逮捕に導いたものは、新聞活動よりも、むしろ彼女のユダヤ人救援活動であった。彼女の最初の夫ポラク、カフカ、その終生の友マックス・ブロート、「ミレナへの手紙」の編集者ヴィリ・ハース等いずれもユダヤ人であった。このように多くのユダヤ人と親しい関係にあったミレナは、ユダヤ民族全般に対しても並々ならぬ愛情を抱いていた。それ故、ユダヤ人が弾圧されるのを手を拱いて見過すことはできなかった。危険を冒して彼等をかきまい、最大の努力を払って安全な外国に亡命させてやった。このようなミレナの活動を、もう少女になっていた娘の Honza が大いに助けてくれた。母に似て、早熟で利発な子であった。

正義感とユダヤ人への深い愛情とナチスへの激しい反抗心とに裏打ちされたミレナのユダヤ人救援活動は、遂に無謀とも言える行動へと彼女を駆り立てた。ポーランドのユダヤ人が服に黄色い星印を付けるように強制されたとの情報が伝わると、彼女はわざわざ自分からその黄色い星印を服に付けて、プラハの大通りを濶歩した。同胞のチェコ人に対して、勇気を出して彼女に倣うように訴えたわけである。

こんな行動をゲシュタポが見逃すはずがない。それでなくとも、これまでのユダヤ人救援活動や新聞活動（1939年6月ミレナはゲシュタポによって執筆禁止処分を受けた。ついでに言えば、同年8月、彼女の合法活動の舞台であった Pritomnost 紙は発行停止を命ぜられた）などによってブラックリストに載せられていたミレナは、忽ち逮捕され（1939年9月末）、裁判にかけられ、収容所に送られることになった。娘の Honza はその祖父（ミレナの父）に托された。ミレナは収容所に送られる直前、Honza の訪問を受けた。これが最後の別れとなり、以後二人は再び会うことはなかった。

## 7 収容所生活

ナチスの強制収容所の中で最も有名なものは、言うまでもなく、ポーランドのアウシュヴィッツ（Auschwitz）収容所であるが、そのほかにも各地にあっ

た。例えばトレブリンカ (Treblinka)・マイダネック (Maidanek)・シュトットホーフ (Stutthof)・ラーヴェンスブリュック (Ravensbrück)・テレージアンシュタット (Teresienstadt)・ブッヘンヴァルト (Buchenwald) 等々である。ミレナが収容されたのは、ベルリン北方のラーヴェンスブリュック収容所である。1940年10月にここに入れられたミレナは、3年7カ月の収容所生活の後、病気のために1944年5月に世を去るのであるが、ほとんど死の直前まで反ナチ的活動を続けた。以下少しくその活動ぶりを眺めてみよう。

先ず順を追って、収容所生活の初期から始めよう。これは他の強制収容所についても或る程度言えることであろうが、特にラーヴェンスブリュックの収容所においては、第二次大戦の初期にはかなりの「自由」があったようである。それには幾つかの理由、即ちここがドイツ国内に所在していたこと、ユダヤ人の囚人が比較的少なかったことなどが挙げられるであろう。従って、監視人の目を掠めて種々の「活動」ができた。

この収容所の女子部にはさまざまな種類の囚人がいた。売春・窃盗・傷害などを犯した刑事犯、共産党員・反ナチの自由主義者などの政治犯、ユダヤ人・ジプシーなどのいわれる「劣等民族」等々が収容されていた。ミレナはいろいろな種類の囚人と交わり、彼女等を助けたのである。例えば、彼女はその地位(ミレナは営内病棟で病人のカルテに病状を記入する仕事をやらされていた)を利用して、血清反応が陽性と判定された初期の梅毒患者のカルテに、偽って陰性と記入してやった。この行為は恐るべき危険に満ちていた。発覚すれば死刑はまぬかれなかったであろう。だが、ミレナにはそれをせずにはいられなかった。なぜなら、梅毒血清反応が陽性と記録された囚人はあわれであったからである。医者からは動物並のむごい処置を受け、囚人仲間からも冷たく扱われたのである。正義感の強いミレナには、それはとても黙視し得る光景ではなかった。従って彼女は死を決して、カルテの偽造という危険を冒したのだ。しかもその囚人達をそのまま放ってはおかずに、こっそり治療を受けられるように取り計らってやった。

また、ミレナは、栄養失調の囚人のために、他の囚人仲間と共に収容所の調理室に忍び込んで食物を盗み出すことをやった。また、次のようなこともやった。即ち、ポーランドの若い画家に思い切り絵を描かせてやるために、事務室から紙と鉛筆を盗み出し、自分の責任におい彼女を監視人の目から隠し、労働しないで好きなだけスケッチできるようにさせてやったのである。見つければ相当な罰を受けることは必至であった。だが、ミレナは他人の窮状を見ると、



何かをせずにはいられない性格であった。かくして、収容所内でのミレナの人望は断然群を抜いた(ただ、共産党員だけは彼女に激しい敵意を示した。これはミレナが転向者だったことによるのであろう)。彼女の人間性に感激したあるチェコの若い図書館員は一冊の「書物」を著して、これをミレナに献げた。書物と言っても、紙切れに鉛筆で書いたものを綴じ、ありあわせの布で装幀しただけのものではあるが。

上述の如く、収容所生活にも初期にはそれなりの「自由」があった。しかし第二次大戦の進展と共に、ナチスの囚人政策は急速に狂暴になって行った。先ず、各種の病人の絶滅政策が始まった。癲癩持ち、先天的な不具者、夜尿症・喘息・結核などの患者のリストが作られた。そして彼等は、他の収容所へ移される、という名目でトラックに乗せられて連れて行かれた。そして、そのトラックは囚人達が身につけていた衣類や所持品を積んで戻って来た。そのようなことが何度も繰り返された。もはや彼等の処刑を疑うことはできなかった。こうして、先ず、持病や伝染病などに侵されている囚人が殺されて行った。それからやがて普通の病気にかかっている囚人にも処刑が及び始めた。重病と診断された囚人は連れ出されて外で殺されるか、注射一本で収容所内で殺されるかした。そのうちにユダヤ人が全部連れて行かれ、二度とは戻って来なかった。悲痛な空気が収容所内に立ち込め始めた。ミレナにも殆んど為す術はなかった。しかもやがて、健康者に対する実験手術が始まり、丈夫な囚人も安心できなくなった。その上、食糧事情も悪化し始めた。これは、もともと腎臓の悪かったミレナにとっては何よりも大きな痛手であった。なぜなら、腎臓病は細心の食養生を必要とするのに、苛酷な食糧事情のもとではそれは到底不可能であったからだ。かようにして、ミレナの腎臓病は急速に悪化して行った。だが、彼女は決して苦しそうな顔を見せず、常に明るく振舞い、仲間を励ましていた。

ではいよいよ最後に、収容所生活後期においてミレナが際立った活躍ぶりを示した出来事を述べることにしよう。

前に実験手術のことに一寸触れたが、ベルリンのナチス本部の指令では、健康者で実験手術をされた者は銃殺をまぬかれる、という「恩恵」に浴することになっていた。ところが、ラーヴェンスブリュック収容所のゲシュタポであるラムドール(Ramdor)はベルリンからの指令を仰がずに独断で、実験手術を受けた囚人(主にポーランド人)を処刑しようとした。そこで、上級女監視人ランゲフェルト(Langefeld)の秘書をしていたブーバー・ノイマン女史は、その銃殺を中止させるように、ランゲフェルトに働きかけた。と言うのは、ランゲ

フェルトは例外的とも言えるほどの良心的な監視人だったからである。

話は一寸それるが、ここで、ナチスが女監視人をどのようにして集め、育成するかを覗き見るのも、あながち無意味なことではあるまい。ナチスは地方の工場へ出かけ、そこから女子工員を引き抜くのだが、そのやり方は巧妙であった。「劣等な女たちの矯正施設の監視人として採用したい、給与は今の勤務よりずっと良い」というようなことを宣伝して、女子工員を誘うのである。こうして収容所に連れてこられた彼女等は、予想に全く反して、恐るべき仕事に就かされることになる。即ち、鞭と怒号によって女の囚人を酷使するという、ぞっとするような任務を与えられるのである。余程の事情がない限り、辞任することは許されない。泣く泣く先輩に倣って囚人を扱っているうちに、やがて一人前の、即ち、冷酷無惨な女監視人に変って行くのである。しかし、中には完全に野獣になり切れない監視人もいくらかいた。彼女等は持って生まれた優しさのために囚人を徹底的にいじめ抜くことができなかった。可能な限り怒号や鞭を使わずに囚人を指揮した。ランゲフェルトもそのような善良な監視人の一人であった。

ブーバー・ノイマン女史は囚人でありながら、このランゲフェルトの秘書に抜擢されていた。女史の速記術とロシア語力が買われたのである。女史はこの人の善い監視人の信望を一身に集め、たびたび二人は、囚人と監視人という立場でなく、対等な人間として話し合うほどになっていた。

このブーバー・ノイマン女史に「実験手術を受けた囚人の命を助けてほしい」と頼まれれば、ランゲフェルトとしても「いや」とは言えなかった。すぐ彼女は、身の危険も顧ず、ゲシュタポのラムドールと強硬に談判した。その結果、75人の囚人の命が救われた。と同時にランゲフェルトは逮捕され、ブーバー・ノイマン女史は収容所内の牢獄に入れられてしまった。そして女史は乏しい食事のため餓死寸前まで追い込まれてしまったのである。

ここにおいて、ミレナの大活躍が開始されるのである。彼女はかねてから、収容所勤務のドイツ人の間で「不正」が行なわれていることに気付いていた。即ち、医者ローゼンタール（Rosenthal）とその愛人である看護婦のクヴェルンハイム（Quernheim）とが病気の囚人の中から犠牲者を選んで秘かに注射で殺害し、彼等がはめていた金歯を私物化して、それを売っていたのである。死人の金歯を取り出すことは差しつかえないどころか、むしろ命令されていたのだが、それを私物化することは厳重に禁止されていた。それは国有物として国家が管理することになっていた。ミレナはこの点に目をつけた。彼女はブーバ

ー・ノイマン女史の救出を交換条件に、この「不正」をゲシュタポに密告しようとしたのである。これは、まさしく生命に係わる危険な行動であった。もしラムドールが医者と看護婦を庇って、ミレナの密告に耳をかさなかったらどうなるであろうか。結果は明らかだ。忽ち彼女は死刑に処せられてしまうであろう。だがミレナは敢えてこの危険を冒した。ブーバー・ノイマン女史への深い友情と持って生まれた正義心と勇気とが、この薄氷を踏むような冒険を決行させたのである。

結果は上々であった。ミレナのジャーナリストとして練り上げられた説得力と毅然たる態度それに卓越したドイツ語力とが相俟って、この危険な取り引きは成功したのである。即ち、ラムドールはミレナの主張を全面的に認め、医者と看護婦をすぐ逮捕し、ブーバー・ノイマン女史を牢獄から出した。

なお、逮捕された監視人ランゲフェルトのその後の運命についてであるが、彼女は、「ドイツの政治犯の道具であり、かつ民族主義的なポーランド人に同情を持っていた」という罪状で、長々と裁判にかけられたが、結局のところ証拠不十分で無罪となり、同時に監視人の職を解かれた、とのことである。

## 8 ミレナの最期

この間に、ミレナ健康はますます蝕まれて行った。彼女を元気づけようとして、1943年8月10日、ミレナに心服していたチェコ人の仲間達が、彼女のために「盛大な」誕生パーティーを開いた(ミレナはこの日満48歳になった)。監視人やミレナに敵意を持つ囚人達の目を掠めての誕生祝いであった。しかし、友人達のせっきくの好意にも拘らず、ミレナ健康は決して快復せず、悪化の一途をたどるばかりであった。重病人であることが分れば、注射で殺されることは明らかであった。従って、弱った体に鞭打って彼女は働いた。その結果ますます病状を悪化させてしまった。しかしその時、囚人全体、特にミレナにとって都合の良いことが起きた。彼女の父が医科大学で教鞭を取っていた時、その教えを受けたトライテ(Treite)という医者が、悪虐なローゼンタールの後任として赴任して来たのである。彼は良心的な医者で、自らの責任においてできるだけ病人を庇い、親切に治療してやった。特に彼は恩師の娘であるミレナには親切であった。彼女の近況をその父に報告してやったりもした。そして遂に彼の執刀でミレナの腎臓手術が行なわれた。1944年1月のことである。その結果彼女は一時元気になった。しかし4月になると、今度はもう一方の腎臓が悪化した。もはや助かる見込みはなかった。だがこんな状態でも、ミレナは父か

ら送られて来た差し入れの食物を他の病人に分け与えて、元気づけたり、はげましたりした。しかし、とうとう彼女の最期の時がやって来た。1944年5月15日の夕方意識を失ない、同5月17日息を引き取った。連合軍ノルマンディー上陸(1944年6月6日)の20日前のことであった。行年49歳、さながらドラマのヒロインのような波瀾に富んだ生涯であった。では次に、ミレナの最期の場面を描いたブーバー・ノイマン女史の文章を引用して、この拙ないミレナ伝を終らせることにしよう。

「5月15日の午後、ミレナが死に瀕している、という知らせが仕事中の私に届く。一瞬もためらわずに私は全くあっさりと仕事場を離れてしまう。ほかにもどうしようがあるだろうか。死に瀕したミレナは病的爽快さに包まれて横たわっている。彼女の顔は輝き、目はきらきらと光り暗青色を呈している。私が歩み寄ると、腕を拡げ、あのたぐい稀なほど美しい独特のしぐさで、私に挨拶する。彼女はもはや喋れない。チェコの友人達がやって来る。彼女等はベッドを取り囲み、窓の外に立つ。幸福に満ちた表情でミレナは皆を見上げ、そして生と別れを告げる。夕方彼女は意識を失なう。死との戦いが17日まで続く。それからやっと私はバラックにこっそり戻る。私にとって人生はその意味を失ってしまった」<sup>(8)</sup>

## 〔注〕

- (1) Margarete Buber-Neumann : Kafkas Freundin Milena, S. 134
- (2) Kafka : Briefe an Milena, S. 98
- (3) Margarete Buber-Neumann : Kafkas Freundin Milena, S. 142
- (4) 同上 S. 142
- (5) 同上 S. 210 ff.
- (6) 同上 S. 224
- (7) 同上 S. 226
- (8) 同上 S. 311

## 〔参 考 文 献〕

〔注〕の項であげたものは除く。

Klaus Wagenbach : Franz Kafka in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Rowohlt Verlag, 1964. (塚越敏訳「フランツ・カフカ」, 理想社, 昭和42年)。

Klaus Wagenbach : Franz Kafka. Eine Biographie seiner Jugend (1883—1912) Francke Verlag, 1958.

Max Brod : Der Prager Kreis, Wohlhammer Verlag, 1966.

Gustav Janouch : Franz Kafka und seine Welt, Hans Deutsch Verlag, 1965.

Franz Kafka aus Prager Sicht, Voltaire Verlag, 1966.

Willy Haas : Die Literarische Welt, Paul List Verlag, 1957. (原田義人訳「文学的回想」, 紀伊国書店, 昭和34年)。

Max Brod : Franz Kafka. Eine Biographie, S. Fischer Verlag, 1962.

藤戸正二 : 「カフカ——その謎とダイレンマ」, 白水社, 昭和42年。

モーリス・ブランショ : 「カフカ論」(栗津則雄訳), 筑摩書房, 昭和43年。

シーセル・ロス : 「ユダヤ人の歴史」(長谷川真・安積鋭二訳), みすず書房, 昭和41年。

小辻誠祐 : 「ユダヤ民族史」, 誠信書房, 昭和40年。

「東欧史」(世界各国史 XIII), 梅田良忠編, 山川出版社, 昭和38年。